

# NOTIA 対象児継続調査結果

2014.6 NOTIA

NOTIA では3年前から訪問対象児に対して KIDS による発達検査とアンケート調査を実施している。KIDS は親による自己記入式の発達検査である。これを初回訪問後、概ね1か月以内に最初の検査を実施。その後訪問終了時まで、およそ1年に一度、実施している。

この度、最も長く計4回（約3年間）のデータがそろっている25人について、データを分析した。

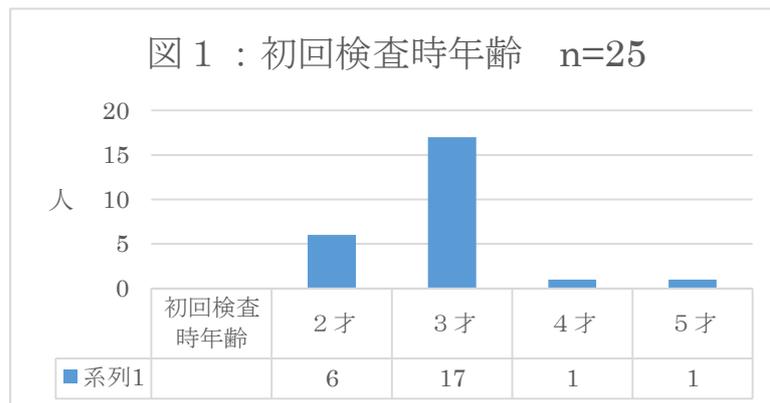
## 1. 対象児プロフィール

対象児25人の内訳は以下の通り。

性別： 男21人、女4人。

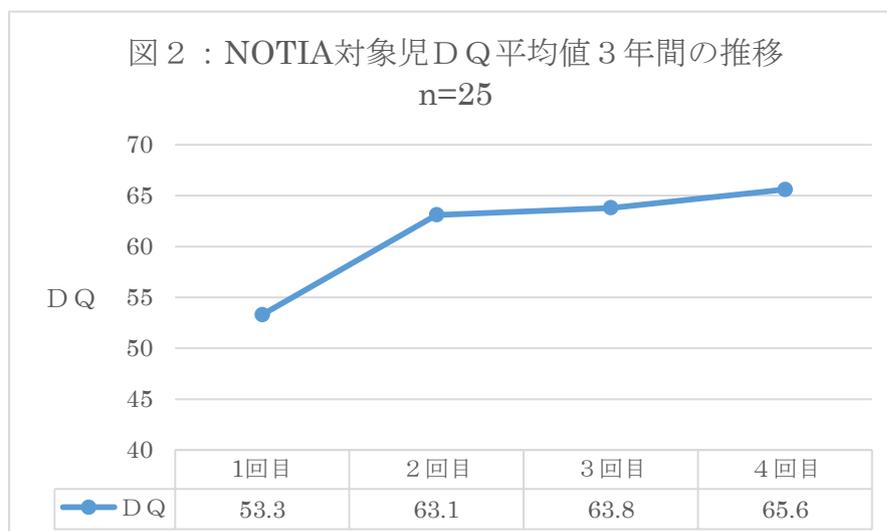
初回検査時年齢： 2才 6人、3才 17人、4才 1人、5才 1人。

診断名： 自閉症スペクトラム ASD（自閉症、広汎性発達障害を含む） 22  
ASD 疑い 3



## 2. 対象児の変化

(1) 発達指数平均値の推移



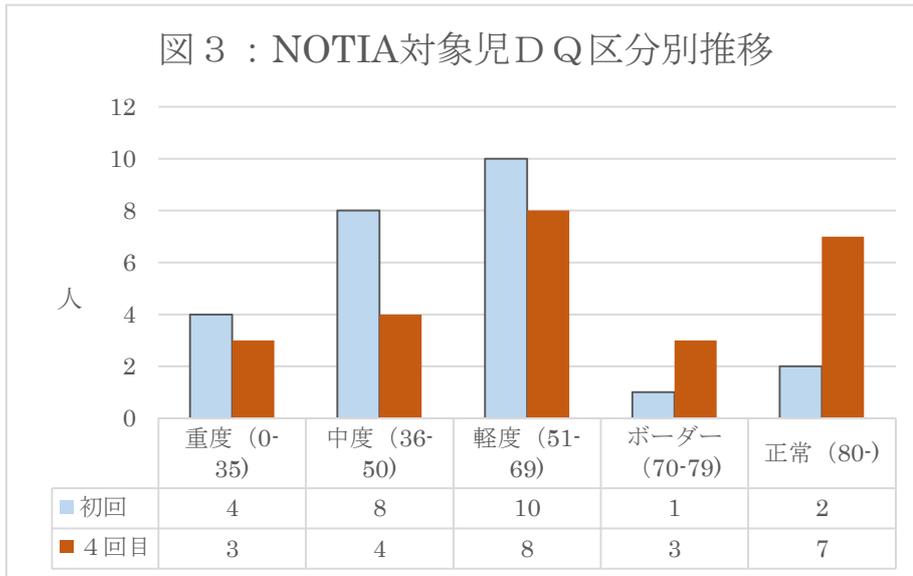
25人の発達指数（DQ）の平均値の変化は図2の通り。初回53.3から4回目は65.6と約3年間で12

ポイント増加した。これは統計上有意の改善である ( $t=-4.09$ ,  $df=24$ ,  $p<.001$ )。

### (2) DQ 区分別の推移

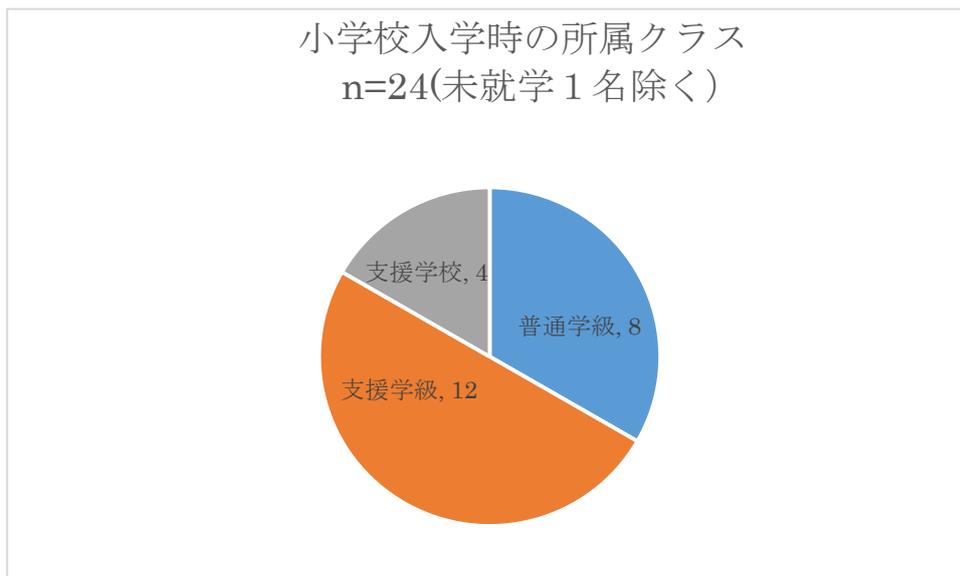
次に対象児を知的遅れの程度の区分（重度、中度、軽度、ボーダー、正常）別に分け、初回検査と4回目の検査で、その人数構成を比較した。

結果は図3のとおりである。初回に比べて4回目は重度、中度、軽度の子どもが減り、ボーダーラインや正常域の子どもが増えていることがわかる。



### (3) 小学校進路別

25人のうち24人が小学校に入学している。一人は未就学。



普通学級に入学した児童が特別の支援を受けているかどうかの内訳は、

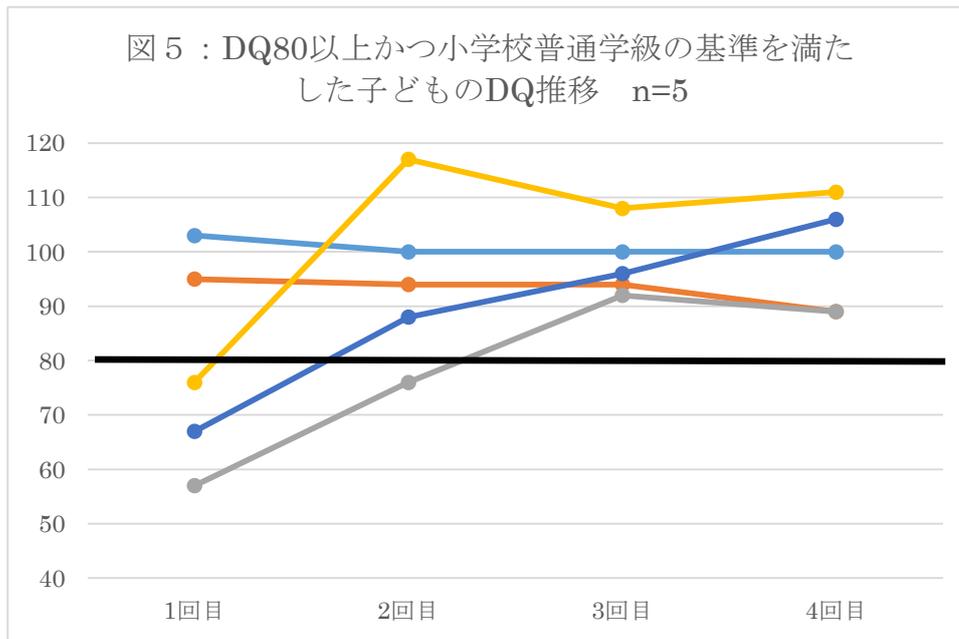
援助なし 6人

何らかの援助あり 2人

であった。さらに普通学級に入学した児童のうち、ロバース博士に倣って

「DQ80以上でかつ小学校普通学級に付き添いなしで入学したもの」という基準を立てると、この基準を満たす対象児は5名（20.8%）だった。

この5人の個別のDQ変化を次のグラフに表す。



### 3. 他の対象児の調査結果

2回～3回（約1～2年間）のKIDSデータが得られている対象児はさらに多い。

初回と二回目のDQが得られているのは178人である。その平均値は初回53.7、二回目61.4で約8ポイントの上昇であり、統計上有意の改善が認められる（ $t=-7.63$ ,  $df=177$ ,  $p<.001$ ）。

初回、二回目、三回目のDQが得られているのは80人である。その平均値は初回52.8、三回目61.6と約9ポイントの上昇。こちらも統計上有意の改善が認められる（ $t=-5.45$ ,  $df=79$ ,  $p<.001$ ）。

